



ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第5号

発行日 2016年4月20日

発行人 矢代 しづ

秋田市御野塩7-1-29-305

龍

雛菊の匂いがする少女よ
夢の裳裾をひきずる龍のことを
また考えていたのですか
リンドウ色の湖の畔で

鈴蘭の匂いがする少女よ

龍は

よろこびの色に輝く

あなたの守り神――

苺の匂いがするかわいい少女よ
早い流れに溺れ沈みかけたとき
龍はすがたをあらわした

水の匂いがする少女よ

龍と一緒に

ことばの星で詩人になれ！

ティーカップ・グラス I

ファイア・レッドの窯は

溶解した硝子がねつとりとろけ

焰の束がとてつもないエナジーを生む

まさにマルス！^{*1}

気魄あふれる熱波が

瞳を遠ざける

厚い扉がひらかれ

焰のまぶしさがわたしを染めた

身を乗り出して

マルスの剣そのままに

吹き竿の先に

硝子を巻きつけた

一気に息を吹き込む

水飴状の豆電球の下玉は

温度が下がると

急速にこわばった表情かおに

上玉を巻き取る

笛を吹く要領で

少しずつ膨らませていく

焼戻し炉で暖めながら

底を平らに整え

水に浸け

泡の模様をほどこす

つぎに白とピンクの水玉模様を かわいらしく

ポンテ*2を底につけ

吹き竿を切り離す

(肩の力を抜いて

手は止めないで^{*3}

飲み口を作る

左手は 竿を転がし

右手は 道具を操り

口を広げ
取っ手をつける

最後に

手作りの証し

底の竿痕あざ(おへそ)を滑らかにすると

徐冷炉で

硝子は

一晚かけて 冷えていく

わたしに似た

透明で もろい硝子

ティーカップ・グラス II

溶解した硝子は束になり とぐろを巻く

窯のなかは 火のけだもの

ファイア・レッドが竜蛇りゅうだまとなり

熱風を吹く

まるで火孔から吹き出す マグマ

ぼくは硝子を手なずけ

ファイア・レッドの調教師になろう

扉を開ける

うねり上がる火柱

燃えさかる焰の海

あくなきエナジーがぼくを責めたてる

あぶない!

焰の手を振りほどき

ひとにぎりの硝子を

- *1 マルスは戦の神。
- *2 先端に硝子種をつけた竿で、吹き竿を切り離すときに使う。
- *3 先生の言葉

剣先にからめる

どろりと

流動する硝子の血に

ぼくは一気にいのちを吹き込む

響き合わない呼吸

水飴状の硝子は

すぐつめたい石に

ぼくはなんども挑む

小さな時が流れ

むきだしの

未来を憧れる熱い想いに

ぼくはやわらかいところで触れてみる

石は溶けて

硝子がかたちをもつ

底に笑窪^{えくぼ}

ひとつのティーカップ・グラス

硝子は

一晩中 長い夢をみる

ぼくは

からだの熱りを冷ます

*出雲大社の信仰の対象。



春の兆し

徒然のエチュード III

4

おしゃれな女性が前を通る

老婆が後ろを通る

あまい香りにつられ ふりむく男

5

ほんわかとした明かりの

菜の花がゆれる

蝶のカップルが戯れている

6

鳥は群れをつくつてねぐらへ

女は想いを胸にたたんで

ひとりの夜へ

7

わたしが生まれなかったころ

姉はまだ末っ子だった

独り占めのオツパイはやがて――

1

美しいイマージュを

矢継ぎ早に抽出するアーティスト

ことばのイマージュは……

2

一日に五人と話す

これ ボケ回避法

どうりで独り言が増えたわけだ

3

足を見る

爪先はいつも前向き

明るいポジティブ思考

8

そこじゃない もつと右

そこそこ

あゝ マジックハンド

9

やさしくかみください

ことばを反芻する

夜の思惟の部屋

10

わたしは水になる

細長い時を渡って

龍に会いに行く

11

陸^{おか}へ上がってから何も食べてないん

蛇

鱈腹食べる 象

蝶よ おごって

12

犬が涙ぐむ

瞳のなかに深く沈潜する

没却された記憶

13

セピア色の写真が一枚

少女は

むかしの匂いをかぐ

14

ガスがサツと晴れたら

さ青の空の階段――

初恋の山に逢いに行くぞ

15

アホウという名の鳥よ

あなたに優雅な名前を贈ります

沖の大夫 きょうから海の美女！

16
しなる愛
父の背負いもつこに
姉とわたし

17
地面に描いた
へのへのもへじ たこにゆうどう
とおい昔の文字あそび

18
珊瑚色の風が駆けてくる
まっすぐ駆けて
わたしの頬っぺを愛撫する

19
ワイングラスの愛の秘密
嗅ぐだけでは
触れるだけでは……

20
酒の発酵 熟成 大吟醸
詩の萌芽 熟思 大傑作
やったね！

21
ああ〜ギリギリ もうムリムリ！
コケティッシュもついにおしまい
山中での生理的現象

22
アイブローがピタリと決まった朝
きょうは順調だ！
こころは快晴

23
虹の橋を渡った愛猫
思い出を刻む ふたり
のかすがい

24

ほっかむりした母の背中
の子守歌

ねんねこ半纏のよだれ染み

25

森林限界にさしかかり
突如として立ち上がる
雲の乱舞

26

わたしは春の海
しなやかに
つま弾いて！

27

心音が弱い
詩に聴診器をあて
即効性の言葉を投与する

28

女帯処地???

『女に』（谷川俊太郎）を読んだあとの
『処女地帯』

29

きょう 詩 愛してた？
なで回しすぎて
のっぺらぼう！

30

若菜色のふきのとう
わたしの初恋のように
ほろにがい

31

あなたの涙で
心が滲む
わたしはしっぽりと――

耳

I

夢想する珊瑚のつぶやき
が
みえる

一月の無情な風に

白いギャザーで縁取りされた鋼色の器は
もてあそばれて前に傾いている

鈍色の陰鬱な波は

岩に打ち当たり

尖った腹をさらけ出している

不思議と

音ひとつ

ない

耳を水に浸すと

クジラの噴水

水中の魚群の舞踏

昆布のジャズ演奏



II

雪の原を歩き

意志的な山に登る

凍える感覚も

曖昧な記憶も

一对の貝殻の螺旋の階段から

ちぎれちぎれに

こぼれ落ちる

冬の重さを抱え 頂上へ

突然

薄い膜が小刻みに震え

膜ごしに

やわらかく丸い雪花の呼吸

山の胎内を流れる清らかな響き

雪山で眠る熊のふくよかな寝息

大切な音

の 耳
イマジネール



修辞

(この世で一番美しいのは?)

それはレトリック
巧みでなければレトリックではない
美しくなければレトリックではない

さがしものはレトリック
なかなか見つからないレトリック
どこへ隠れているのかレトリック

パールグレイの靄のなかだろうか
かなしみ色の波間にひそんでいるのだろうか
まどろみの空にそよいでいるのだろうか

名前を変えてそこにある
顔は見えても見えないレトリック
巧みに隠れたレトリック

暗くてふかい闇の中
手さぐりでさがす
底なしことば

少しずつ
未来を指す方角に
かそけき光

ないよう
で
心を射る
レトリック

【あとがき】

これまでの「徒然のエチュード」は、楽しみながら一気に作ってきたが、今号は違った。「11」の一行目が、なんとしてもできないのである。ことばの回路がストップしたのか、ことばが一步も前へ歩き出さないのだ。頭をひねるもダメ、のたうち回るもついで浮かばず、ドつぼにはまってし

まった。

ふと視点を換え柔軟に向き合ったら、ことばがスルスルと寄ってきたのである。ことばの波を塞いでいたのは、かたい思考の壁だったのかもしれない。やわらかい心とことばの筋力を鍛えなければ、と痛感した次第である。

